

釈迦牟尼

しやうりふかふ

序章 解脱

麗しき四肢を持ったしなやかな青年、憂いに満ちた蒼き双眸、朱の唇は昏く結ばれ、長き睫毛は花に降りて休む蝶の羽のように深く項垂れる。

老病死苦あるのみ。人若く美しく健やかなるときには万物も色彩を帯び、意味ありて為すべき意義に満ちれども、一度これ損なわれ、苦に苛まれるれば色失われ、無味乾燥なるなり。さてはただ苦の已むを祈るばかり。一切の事も余剰なる空疎とぞ想わる。万象はただ若くあるのみ。肉衰えれば精神涸る。一切無色無味狭隘窮燥苦の実像を露する。いかにすべての営み虚しきことか。論尽くせども雲雀の轉りなどと変わるなし。思慮やら精神とやらいうも、理性やら哲学とかやいうとても、雷雲の群がり、閃光や草木の生成や、汐の干満に同じうして、物理科学に基づける自然の現象にしかず。この覚悟すらも。

ただ事実にしからず。何者にもあらず、今爰(ここ)に在る(また)其処に在る(ただ)事実にしからず。

只管(ひたすら)現実にしありて、特性も特定性もなく、この考えにあらずとも、その辺に転がる物でも、世界の果てにある物でも、物でなくとも、上下左右方位、又は空間というような、抽象のものにありても、概念・言葉又は思考・感情にて、如何もよきかな、同じうしてとてもかくても候。

モノ、物質、Material、Physik、
बत , الشئ , Φύσις、

しかし事実とは言えども、目に見えるは、乱反射す光線の波長。これにしかず。ただ網膜に当たりて視神経を通し、脳に伝わりて脳がその波長に差異を設け(註：波長に差異があるのではない。物理的な運動に現に差異が在るのではないかと反駁される方も居られるだろうが、実在の運動の差異は差異ではない。差異という価値概念の企画があつてその設定がなされ、同時に物象的な差異の企画及び設定があつて、初めて差異ができる。それらの原(もと)となるスキームが人間にアプリーに蔵されている)、色彩や陰影等々として釈し、これ、事実、という、事象として脳裏を現象するにしかず。復た音も鼓膜の振動をもてさよう設けて戻すように釈すにしかず。

又皮膚筋肉血管内臓骨等々体に起こりし事象に対し、接触炎症裂断切破穿孔崩碎腐敗侵蝕拒絶反応等々々々差異の企画を做起てこれを設け、危機求欲安寧等々なる価値の差異の企画を做起てこれを設け、苦脳痛痒喜怒哀樂恐怖不快等々の感受の差異の企画を做起てこれを設け、存在という差異の企画を做起てこれを設け、以て意識となす。畢竟、人生という事実を、
做る。

現実、これにしかず。差異たるもの、即ち本質性も数も形も、量も重さも触も匂いも味も、空間占有性も、意味も意義も理

由も因果も、真偽正誤実虚理妄妄も存在も、做られしモノにしかず。

されば「それ何ぞや」と問われても、答なく、原を糾しても、そこにあるは、只管曇（厳密には、原とか、結果とかいう、因果構成上の順・関係の差異も設定である）にしかずと言わざるを得ず。只唯空。

さらにかような考え自体もこれらに基づきしモノにしかあらず、しかも思考とは、脳神経細胞の特定なるイオン・チャネルが開かれ起る、脳細胞膜の内外の電位の、正負の関係の逆転にして、電気的な発火現象なるインパルスにして、インパルスによる脳神経伝達物質の分泌起りて、特定なる情動を生き物に起こさしむる結果にしかず。さような物的な現象（化学的な反応）にしかあらず。

とは言え、さよう脳内現象の分析も、観察に依拠し、観察は識別設定にしかず、さりとしてそれも論理思考の運びにしかず、その運動のフォルムのさようなかたちなす意味、そのかたちなるべき理由を、我らは知らず、そもそも理由云々とかいう在り方・センシング・運び等々既に論考にしかず、何をかいわんやいうもいわぬもぐわふて多ぬぐわふて多ぬぐわふて多ぬぐわふて多ぬぐわふて多ぬぐわふて多ぬぐわふてもかくても候。

さよう想えば論考も、もはや心軀を癒やさず。哀しく空疎する思惟。さりとても我ら人は、生きるということとは意識に於いて他に在らず。意識しかなく、意識は思惟にしかず。思惟は論理にしかあらず。思料を凝らせど、他に思い至らず。この球体のうちに在りて外に在らず。

あたかも無限なる空間を思い浮かべられぬがごとし。又あたかも四次元の空間を空想すること叶わぬがごとし。又々あたかも面積のなき点（点）を想像し得ぬがごとし。

自然の機により思料にはかく限りあらんや。有無も是非もなく。

意識爾已（のみ）とは、拠る邊なきに等し。さりとても他に杖なし。人には論理に拠るしか在らず。論理に拠らずば何も為せず。しかも論理に拠らば、論理を証左するために論理を行使すること適わずという。すなわち論理を証左すべき論理なく、論理は論理に拠りて無為と架空とする憂きめに遭ふ。

何となれば、いかようなものと雖も、証左は論理にしか為せず、復た証左すべき論理自体を未証左と架空せば、いかなる証左方法もなく、論理は未証左、未確定、無明のものと架空されざるを得ず。

すなわち論理を証左せんとす時点に於いては、論理は証左以前のものにしかあれば、論理を証左す方法として用いること非なり。これ証左されぬは論証の用に足らずという、論理の運航規則に拠りてかくなん。

しかれども論理の運航規則とは、すなわち論理の骨髓にしかあれば、論理が証左を能くせずとせば、運航規程も用をなさじ。されば証左前の論理は証左能力無効也という説も又無効ならんや。

しかし仮令（たとえ）さようにあるとても、論理の証左権行使資格を剥奪の上の話にて、畢竟、意味なし。又さりとても論理無効を決す運航規則も有効に非ず。あたかも自らの尾を咬む原蛇（ウロボロス）のごとく、自己破壊するも、それも復た論理の孕む架空なりし哉。あはれ。

嗤（わら）う莫（な）れ。

戲論也。まさに空論 無意義なる議論 言葉の戯れ、遊びにしかず。虚し儚し。空転焦燥する絡繰り。まさに架空なる空架の架空なる空架。それも考概論考にしかず。虚しも虚しく、儚しも儚し。論理と同じ命運にあるが仕様也。拠る邊ならず。一切原蛇の空燥也。

青年は鬱々と倦み病む。夢るは生の不安 漠然たる懼れ。激情なき焦燥 あゝ、すべて書を読み果てても甲斐なし。先賢より哲理を学びても無為。いかような公理も救わず。ただ迫真するは欲いの爾々(まま)にあらぬ老病死苦

美々しき若人かくも思い煩い、儚き計らいの絡繰りなる現世(うつしよ)の、動しぬ鉄の壁に虚しく碎ける。只簀行動すべき爾(己)のみ。

城壁に囲まれし繁榮に簞ざる街の誇り高く壮麗なる釈迦族の門より出でて、叢林に坐す。

火炎のごとく苦行する。苦行者のパトスは熱く滾り、食を断ち、一日一粒の穀物 ヨーガを行じ、渴きにも堪え、呼吸をさへも制御する。感覚は研ぎ澄まされ、匂いは微細の奥深をも嗅ぎ識り、心の眼は見えぬ暗闇のもの、遠くのものをも察知し、雨降や風の変わりを予見し、山や樹木の言葉解し、事物の真奥を見極め、靈魂を觀する。神に通ず。

されどもさらに苦行を進めるに、肉体は衰え瘦せて乾涸び細く尖りて皺に埋もれ、眼簾落ち窪み、骨皮の死骸のごとくになるにつれ、意識は朦朧として妄想蔓延り跳梁跋扈し、身の神靈魂魄を食い破る。

「是れ、正しく解脱に導く道に非ず。現に悪しき道と見ゆ」

苦行を捨て、穢れ汚れた身軀を清めんと欲す。乾燥し切つて油分の抜けた脂が埃土と混ざつて皮膚に固まつていたからである。しかし体が言うことを聞かない。

このときスジャータはニグローダ樹に感謝するため、祭祀を奉じていた。下女は樹下に坐していた釈迦を見て、樹神と思い、スジャータに知らせる。釈迦に供養す。釈迦はスジャータから与えられた乳粥を喫食す。スジャータはこの乳粥に諸大神妙汁を混ぜていた。力を甦らせし釈迦は尼連禪河(ナイランジヤナー)に沐浴する。

ナイランジヤナーはマガダ国の首都、王舍城(ラージャグリハ)の東北、靈鷲山(りようじゆせん)の側にある河。菩提樹の下に坐し、瞑目する。澄み切つた肉体に氣力を漲らせて氣息を整えた。

初禪を行ずる。

結跏趺坐し、半眼にして心を静め、欲まみれの想いや行為を離れ、瞑想による微細な思考の状態に入る。これを覺と言う。覺より深まつた集中の深淵に沈静し、觀察し、思惟することによつて甚深微妙な法界の存在を感じる。これを觀と言う。觀の寂靜を保つとやがて觀る対象物と自分との対立が雲散し、縛めから解放され、重力から離れ、きよらかの喜悅が訪れる。これを喜と言う。喜悅に満ち、自然と物事への執着を離れ、欲を捨て、聖淨で崇高となつた清々しい喜樂に至る。これを樂と言う。さらに心を集中し、集中によつて靜寂を抜け、ある種の力を練り上げる。これを一心と言う。

覺・觀・喜・樂・一心の五つを五支と言ひ、五支の功德で充たすこの初禪はすべての禪定の源となるもの、基礎禪とも呼ばれるもの。

第二禪を行ずる。

第二禪を行ずる。

喜の境地の留まることなく、これに染著せず、さらに静寂を深め、一切を無分別に観ず。差異がやわらぎ、曖昧になり、柔らかにうつつと霧のよう消ゆる。かくして自ずと捨に至る。捨は静寂の極み。如実観察の法眼が啓かれる。鏡に一切が映るよう、観想になり切つて一切になる。一切が自分として作用し、自分が一切となつて作用する。これが念である。一切を透り透らせ、その清み明けくある透明の度を鮮烈にし、意識を超えた意識に達し、捨念智樂を成就する。この第三禪において初めてヴィパッサナ瞑想に入るのである。すなわち止行から観行に移る。

第四禪は禪定によつて生ずる一切滅一切解放の樂をも斷ずる。むろん意識的に斷するにあらず。心の働きが正常に作用し、さやかにきよらに自然と、法の爾に、最後に残りし淡く微かな分別さえも透明とし、三千億兆並行宇宙世界をも透き徹す深き清淨となし、第四禪は成就される。こゝまで受滅の行という。

次に空無辺処を行じ、無色界の第二天へ昇る。虚妄が無限無際限であると観ずる禪定にて、空間を無限と観ずる禪定である。定を抑制し、涯限りを築ける一切の想を滅し、空間が無限大であると思惟する。

識無辺処を行ずる。無色界の第三天へ昇る。心の識別作用の無限無際限となりし禪定。意識を限りなく際なしと観する禪定である。識が無限大であると思惟する。

無所有処を行じ、無色界の第三へと昇る。いかなるものも存在せず、所有しておらぬ禪定。何者も存在するにあらずと観ずる禪定である。何者も存在しない、零であると思惟する。

非有想非無想処（非想非非想処）を行ずる。無色界の最高の天へと昇る。心に映り現われる表象が現象することなく、現象しないということもない禪定。想いがあるのでも、想いがないのでも、想いに非ずということでも想いに非ずというところにさえにも非ざる禪定である。何者もない、零であるとする定をも超え、極々微細纖弱なる想のみが残滓し、無想非想非無想非非想に限りなく近い。

滅尽定（滅想定、滅受滅）に入る。すべての想が滅する。一切が尽きてなくなる平穩靜寂の世界。心機が全止滅する。心機が止滅するばかりでなく、身体の働きも止まる。呼吸も心臓の鼓動も極微細になり、生きているのか、死んでいるのか、わからない状態である。天穹の大伽藍が啓け、花の雨が降り、芳香が馨り、美妙的音楽が流れ、大地は歓喜に振動し、霹靂は寿ぎして乱舞し、大いなる光が差して地獄の底までも照らし、一切の罪穢れは清められ、森羅万象を象り衝き動かす苦しみは解き放たれ、癒やされ、浄化され、きよらさやかとなりて、世界は炎と燿く奢らかな光燦に焔焔焰焰爛爛炸燭爛にまで遡りて、一切は存在を倣（な）し、無際限に真にして、聖の聖なる、未来永劫の燦燦揺るぎなく、永遠なる存在を倣す。

解脱した。出家から六年後、三五歳であつた。

「為すべきは為された。もはや生存に戻ることはない」

死を決する。

荘嚴なる帝釈天（インドラ、雷電神）が五色の雲を所作の軌跡と牽きて、光輝に身を包みつつ降りあらわれ、勸請す。

終章

涅槃

般木

「喉が渴いた。水が飲みたい」

路傍の樹下に斃れ、喉の渴きをアーナンダに訴えた。

マツラ国（耒羅国）の鍛冶工の子チュンダのマンゴウ林で食事の供養を受け、スーカラ・マツダヴァを食べた後、痢病を發し、八十歳の肉体は激しい苦痛に襲われていたのだ。

ヒラニヤヴァティー河を渉り、クシナーラーのウパヴァッタナの双つのサーラ樹（沙羅樹）の間に瘦せ衰えて乾涸びた体にて横臥し、死す。